埴 の 里

神崎都神河町（旧大河内町）

昔、昔、大汝命（おおなむちのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）の二人が、日本の国を治めておられたことがありました。

大汝命は、「日本一の力もち」といわれた大柄な男で、いっぽうの少彦名命は、反対に、からは小さかったが、動作が機敏で、しんぼう強さでは抜群でありました。二人は、大の仲よしでありました。

二人については、たくさんのことが語り伝えられていますが、ここに書くのは、そのうちでも一番ゆかいな話です。

少彦名命が大汝命にいいました。

「埴（赤土のねんど）の荷を背負って遠くへいくのと、うんこするのをがまんして遠くへいくのと、おぬしなら、どちらを選ぶ。」

大汝命は、わらっていいました。

「おれなら、うんこをがまんするほうをとるな。」

少彦名命は、すかさずいいました。

「じゃあ、きょうそうするか。」

「よしやろう。」

小男の少彦名命は、ずっしりと重い埴の荷を背負って、よたよたと歩きはじめました。

大汝命は、にやにや笑っていいました。

「荷物を背負うた男と、何も持たずに旅をするのは、よいものだな。」

少彦名命は、まっ赤な顔をして汗を流していましたが、大汝命はおおまたで、ゆったりと歩いていきました。

何日か旅をしつづけて、神崎郡までやってきたとき、少彦名命の顔は汗でよごれ、日に焼けてまっ黒になっていました。が、大汝命はまっ青になり、ひたいからあぶら汗をたらしていました。

大汝命は、とうとうしんぼうしきれなくなり、道ばたの草むらのなかへかけこむと、いっ気に思いをはらしました。あまりの勢いに、うんこはささの葉にはねとばされて、とびちって石となり、つもって山となりました。はじか野村はこうしてできました。

それを見ると、少彦名命も、背負いつづけてきた埴の荷を、道ばたに投げすてました。赤土はかたまって埴の里ができました。

大汝命と少彦名命は、手をとりあって、「あっははっは。」と、笑いころげました。

出典：「ひょうごの民話」
編集：「ひょうごの民話」再編復刻編集委員会
発行：財団法人　兵庫県学校厚生会
2012/6/25 第 1 刷発行